

英文学史の記述に関する一考察

—— English Chaucerian ジョン・リドゲイトの記述と評価をめぐって ——

轟 義 昭

はじめに

「一方、詩の方はどうか。イングランドにもスコットランドにも、チョーサーを師と崇め、その詩風を模倣する詩人たちは続出したが、いずれもチョーサーの詩の形骸を学んで、そのエスプリを学ぶものはほとんどいなかった。十七世紀の詩人・批評家ドライデンは、チョーサーを「英詩の父」と呼んだが、この父の子たちは、そろって不肖の子らであった。わずかにスコットランドの、ジェイムズ一世、ロバート・ヘンリソン (Robert Henryson, c. 1425 - c. 1506)、ウィリアム・ダンバー (William Dunbar, c. 1460 - c. 1520)、ギャヴィン・ダグラス (Gavin Douglas, c. 1475 - c. 1522) に、やや見るべき作品があるのみである。イングランドのリドゲイト (John Lydgate, c. 1370 - c. 1451) など虚名のみ高く、いたずらに多量のインクを空費したにすぎない。」

この箇所は、橋口稔編著『コンパクトイギリス文学史』(荒竹出版, 1983年)のなかで、安東伸介氏によって分担執筆されたチョーサー派詩人たち (Chaucerians) に関する記述 (p. 30) である。ここで注目すべきは、安東氏が彼らに対して「そろって不肖の子ら」という表現を用いてネガティブな評価を下している点と、特に、リドゲイトに関して「虚名のみ高く、いたずらに多量のインクを空費したにすぎない」と力説して文学史の一ページから彼を死滅させるほどの手厳しい評価を下している点である。果たしてこの記述は安東氏の個人的な判断によるものであろうか、それとも先駆者たちの考察の成果に耳を傾けて、それを拠り所にして氏が個人的な好悪の色をわずかに添えただけのものであろうか。

筆者はここで何も安東氏の歴史のテキストの「地平」を非難しようとしているわけではない。仮に文学史家も「読者」であるという H. R. ヤウスの考え方¹に同意するならば、文学史家たちには文学の歴史についての記載事項を取捨選択できる裁量権だけでなく、それなりの視点をもって記述に批判を加える権限も許されることになるからである。

幸いにも、筆者は1992年度から鹿児島県立短期大学で英文学史を担当することになり、こうした歴史記述に関する問題は早期にでも取り上げて紹介する価値があるだろうと思った。そこで、ささやかではあるが筆者の研究対象者であるジョン・リドゲイトに焦点を絞って研究ノートという形

1 H. R. Jauss 著, 巒田収訳『挑発としての文学史』, 岩波書店, 1976年, p. 29.

式でその問題をまとめてみることにした。

さて、本稿で取り上げる英文学史のテキストに関して言うと、専門家が利用する *Cambridge History of English Literature* (当該箇所はⅡ. pp. 197-205) のような本格的なものではなくて、大学生(短大生)が利用するような国内で出版されているもので、(1)いくら古くても本学の図書館に所蔵されているもの、(2)大学英語教科書協会による「大学英語教科書目録(1993年版)」に掲載されているもの、(3)本学でアメリカ文学史を担当されている同僚²からのアドバイスによって揃えることができたものに限定されている。このなかには、外国人の文学史家によるもので訳出されたテキストおよび英文によるテキスト(リドゲイトの記述がない場合は取り上げていない)も含まれている。それらは次のとおりである。

- 1 大和資雄『英文学史(上・下巻)』, 野村書店, 1946年
- 2 高村勝治編著『英語・英米文学講座 英米文学史』, 河出書房, 1952年
- 3 斎藤勇『イギリス文学史(改訂増補第五版)』, 研究社, 1957年, 1974年
- 4 R. H. Blyth, *A Survey of English Literature*, 北星堂, 1957年
- 5 アイヴァ・エヴァンズ著 朱牟田夏雄 他共訳『小英文学史(改訂増補第4版)』, 北星堂, 1961年, 1984年
- 6 佐瀬順夫『要説イギリス文学史[増補版]』, 英宝社, 1962年, 1986年
- 7 斎藤勇『英文学史概説』, 研究社, 1963年
- 8 Peter Milward, *A Historical Survey of English Literature*, 研究社, 1969年
- 9 平井正穂・海老池俊治編著『イギリス文学史』, 明治書院, 1971年
- 10 岡沢武『イギリス文学史概説』, 篠崎書林, 1972年
- 11 小倉多加志『イギリス文学史要説』, 南雲堂, 1975年
- 12 杉本龍太郎・J. C. McDonald, *A Brief History of English Literature*, 篠崎書林, 1976年
- 13 松浪有・御奥員三『講座 英米文学史 詩Ⅰ』, 大修館書店, 1977年
- 14 斎藤美洲編著『イギリス文学史序説 社会と文学』, 中教出版, 1978年
- 15 J. マルガン& D. M. デイヴィン著 成田成寿訳『イギリス文学史<増補版>』, 八潮出版社, 1978年, 1991年
- 16 吉田三雄『英米文学史概要(改訂版)』, 成美堂, 1980年
- 17 平井正穂『イギリス文学史 人間像の展開』, 筑摩書房, 1980年
- 18 前川祐一・江河徹・船戸英夫編著『原典で読む英文学史』, 弓書房, 1982年
- 19 橋口稔編著『コンパクトイギリス文学史』, 荒竹出版, 1983年
- 20 岡田忠軒『ブックレット英文学史』, 南雲堂, 1985年

2 筆者がこの論文を執筆できたのも山本秀行氏の多大なる情報提供のおかげである。ここに謝意を表したい。

- 21 川崎寿彦『イギリス文学史入門』, 研究社, 1986年
- 22 川崎寿彦『イギリス文学史』, 成美堂, 1988年
- 23 神山妙子編著『はじめて学ぶイギリス文学史』, ミネルヴァ書房, 1989年
- 24 芹沢栄『イギリス文学の歴史』, 開拓社, 1990年
- 25 パット・ロジャーズ編 櫻庭信之監訳『図説イギリス文学史』, 大修館, 1990年
- 26 志子田光雄『英国文学史要』, 金星堂, 1992年
- 27 Peter Wagner, *An Outline of English Literature*, マクミラン, 1992年
- 28 三ツ星堅三『イギリス文学史概説 社会と文学』, 創元社, 1993年

1. まず、安東氏の記述を考察の足掛かりとするために、彼のリドゲイトに対する歴史記述と評価の実状を整理しておきたい。

- [歴史記述]
- 1 生まれた年及び死んだ年は1370年頃から1451年頃である
 - 2 「イングランドにもスコットランドにも、チョーサーを師と崇め、その詩風を模倣する詩人たちは続出」。彼はChauceriansの一人である
- [評価]
- 1 「いずれもチョーサーの詩の形骸を学んで、そのエスプリを学ぶものはほとんどいなかった」
 - 2 「不肖の子」
 - 3 「虚名のみ高く、いたずらに多量のインクを空費したにすぎない」

この歴史記述にはどの程度客観性があるのだろうか。他の文学史家たちの記述と照らして確かめてみよう。

疑問符(?)付きであろうとなかろうと、1370年－1451年としているのは斎藤(1957)、エヴァンズ(1961)、佐瀬(1962)、斎藤(1963)、Milward(1969)、平井(1971)、マルガン(1978)、橋口(1983)、志子田(1992)であり、1370年－1450年としているのは高村(1952)、斎藤(1978)である。ロジャーズ(1990)は生まれた年を1370年頃としているが、死んだ年を1449年としている。また、Blyth(1957)は1373年頃－1460年頃と松浪(1977)は1373年(?)－1450年(?)として他者とは異なる記述をとっている。このように、彼の生まれた年及び死んだ年は定かではないが、1370年－1451年とする説が有力であることがわかる。

彼がChauceriansの一人であることを指摘する文学史家は多大である。大和(1946)は「チョーサーに私淑した詩人に彼の肖像をつたへたホックリヴヤリドゲイトがあり」、高村(1952)は「イングランドのチョーサー模倣者達には、スコットランドのダンバーのような詩人は一人もいない。オクリーヴヤリドゲイトは、直接チョーサーと面識もあり、チョーサーを師匠と知っている」、斎藤(1957)は「Story-tellerとしてのChaucerには、EnglandにもScotlandにも追隨者が出た」、エヴァンズ(1961)は「チョーサーの模倣者が文壇に現われたが、……トマス・オクリーヴも、ジョ

ン・リドゲイトもその例にもれなかった」、佐瀬 (1962) は「Chaucer に私淑した詩人に、Thomas Hoccleve や John Lydgate がある」、斎藤 (1963) は「中世末期における Chaucer の影響は、顕著であった。England には教訓癖の多い Sir John Gower, John Lydgate などがあり」、Milward (1969) は“Chief among Chaucer’s imitators was JOHN LYDGATE, a prolific versifier”, 平井 (1971) は「この世紀を通じてチョーサーの影響は絶大で、中世第一の多作家リドゲイト John Lydgate やホクリーヴ Thomas Hoccleve のような、その流れを汲む詩人たち Chaucerians が輩出し」、小倉 (1975) は「Chaucer の死後 English Chaucerians [John Lydgate, Thomas Hoccleve (Oocleve) など]…… が現れた」、杉本 (1976) は“The fifteenth century saw the productions of some of Chaucer’s disciples in both England and Scotland. John Lydgate and John Skelton were among his English disciples”, 松浪 (1977) は「チョーサーの後継者として第1に挙げられるのはトマス・アスクで、……次に注目されるのはトマス・ホクリーヴで、……しかし、もっとも多作であったのはジョン・リドゲイトであって」、斎藤 (1978) は「チョーサーの一番弟子であることを自認したジョン・リドゲイトは最も意識的に彼を模倣し、彼の一番の追隨者としての役割を果たした」、マルガン (1978) は「Chaucer を知っていて、彼を師と仰いでいた者たち……彼らは主として翻訳者、あるいは、模倣者であった」、橋口 (1983) は「イングランドにもスコットランドにも、チョーサーを師と崇め、その詩風を模倣する詩人たちは続出した」、志子田 (1992) は「Chaucer の影響を受けた詩人たちは多い。English Chaucerians と呼ばれる *Troy Book* の著者 John Lydgate」、Wagner (1992) は“John Lydgate and John Skelton did not go beyond the imitation of Chaucer” と記述している。とりわけ、斎藤 (1957) の記述は「Chaucerians, Scotland の詩人」の項で、佐瀬 (1962) の記述は「Chaucer と同時代およびその後」の項で、斎藤 (1963) の記述は「Chaucer および Chaucerians」の項で、松浪 (1977) の記述は「チョーサーの周辺と後継者」の項で、斎藤 (1978) の記述は「チョーサーの影響 リドゲイトとホクリーヴ」の項で取り扱われている。

上記以外の彼の歴史記述に関してはどうかであろうか。文学史を参照すると、次の3点だけは絶対に押さえておかねばならない事実である。(1)彼は Bury St. Edmunds の修道僧 (聖職者) であった。(2)彼は 中世第一の多作家 であった。(3)彼の作品。

(1)に関しては、記載例は少ないが、斎藤 (1957) の「‘Monk of Bury’ と呼ばれる John Lydgate」、松浪 (1977) の「もともと聖職者であったリドゲイト」、斎藤 (1978) の「ベリ・セント・エドマンズ (Bury St. Edmunds) にある著名なベネディクト会大修道院の修道士」、マルガン (1978) の「Bury St. Edmunds のベネディクト教団修道僧」、ロジャーズ (1990) の「ベリー・セント・エドマンズのベネディクト教団の僧院の修道僧」が挙げられる。

(2)に関しては、高村 (1952) は「イギリス中世を通じて、最も多作な詩人」、Blyth (1957) は“prolific”, Milward (1969) は“a prolific versifier”, 平井 (1971) は「中世第一の多作家」、松浪 (1977) は「もっとも多作であったのはジョン・リドゲイト」、マルガン (1978) は「飽くことをしらぬ編集者」と記述し、また斎藤 (1957) は「合計14万行に及ぶ」、ロジャーズ (1990)

轟：英文学史の記述に関する一考察

は「多量の作品（10万行は優に越える）」と記述して具体的な数字を出している。斎藤（1978）は「14万5千行もの詩作を残した、類を絶する多作家」と記述して具体的な数字を出すだけでなく、『トロイの書』の作品だけで3万行、『王侯の没落』で約3万6千行、*The Pilgrimage of the Life of Man* で約2万4千行にも及ぶことを指摘している。斎藤（1963）もリドゲイトが「万を越える行数の冗漫な長詩を書いた」と述べている。

(3)に関しては、誰がどのような作品を取り上げて、どのような訳を付けているかが一目瞭然となるように表に整理してみた。

高 村（1952）	<i>The Troy Book</i> 『トロイ物語』, <i>The Fall of Princes</i> 『王侯の没落』, <i>The Siege of Thebes</i> 『テーベの攻圍』, <i>The Temple of Glass</i> 『ガラスの殿堂』, <i>The Pilgrimage of the Life of Man</i> 『人生巡禮』
斎 藤（1957）	<i>The Troy Book</i> , <i>The Fall of Princes</i> 『君主没落記』
Blyth（1957）	<i>The Troy Book</i> , <i>The Fall of Princes</i> , <i>Story of Thebes</i> , <i>The Life of Our Lady</i> , <i>London Lickpenny</i>
Milward（1969）	<i>The Troy Book</i>
松 浪（1977）	<i>The Troy Book</i> 『トロイ物語』, <i>The Fall of Princes</i> 『貴人の没落』, <i>The Siege of Thebes</i> 『テーベ包圍戦記』, <i>The Pilgrimage of the Life of Man</i> 『人生遍歴』, <i>The Life of Our Lady</i> 『聖母の生涯』, <i>The Temple of Glass</i> 『ガラスの城』, <i>Reason and Sensuality</i> 『理性と感性』, <i>The Complaint of the Black Knight</i> 『黒騎士の嘆き』
斎 藤（1978）	<i>The Troy Book</i> 『トロイの書』, <i>The Fall of Princes</i> 『王侯の没落』, <i>The Siege of Thebes</i> 『テーベ攻城』, <i>The Pilgrimage of the Life of Man</i> , <i>The Life of Our Lady</i> , <i>The Temple of Glass</i> 『ガラスの神殿』, <i>Reason and Sensuality</i> , <i>The Complaint of the Black Knight</i> 『黒騎士の嘆き』, <i>Dance of Macabre</i> 『死の舞踊』
マルガン（1978）	<i>Troy-Book</i> , <i>Fall of Princes</i> , <i>Story of Thebes</i>
ロジャーズ（1990）	<i>The Troy Book</i> 『トロイの書』, <i>The Fall of Princes</i> 『王侯の没落』, <i>The Siege of Thebes</i> 『テーベ包圍戦』, <i>The Life of Our Lady</i> 『聖母伝』
志子田（1992）	<i>Troy Book</i>

注：作品は年代順に並んでいない

大和 (1946), エヴァンズ (1961), 佐瀬 (1962), 斎藤 (1963), 平井 (1971), 小倉 (1975), 杉本 (1976), Wagner (1992) のように、彼の記述が選択されながら作品が一つも挙げられないこともあるが、表に見られるように、*The Troy Book* が9件、*The Fall of Princes* が7件、*The Siege of Thebes* が6件あり、これら3作品が—— Blyth (1957) の言葉を借りれば—— “his chief works” である。特に、一冊だけを挙げる場合は、Milward (1969) と志子田 (1992) に見られるように、「トロイ伝説を扱った長篇」の *The Troy Book* になる。

以上の考察の結果、安東氏のリドゲイトに関する歴史記述には客観性が認められるが、一冊の文学史に頼るだけでは歴史に関する必要な知識が読者 (学生) には限定されてしまう。読者は文学史家たちによって切り捨てられた情報を数冊のテキストを参照して補わなくてはならない。従って、大学の図書館には国内で出版されている文学史のテキストを数多く揃えておくことが要求されるであろう。とりわけ、英文学史の講義担当者の責務は大きい。講義の時間に情報の不足部分を学生に随時補足説明するもしないも担当者の裁量に委ねられてくるからである。

次に、リドゲイトに対する他の文学史家たちの評価を考察しよう。

前述の安東氏の評価1と2のように、Chaucerians 全体を包括したネガティブな評価は他にも認められる。斎藤 (1957) は「この時代における Chaucer 亜流の英詩は、不適切な譬話が多く、韻律は定型に拘束され、用語は平板に墮し、すべて法則に囚えられ、かつ冗漫であった」、エヴァンズ (1961) は「チョーサーの模倣者が文壇に現われたが、いたずらに嘲罵を受けるにとどまった」と述べている。特に、高村 (1952) では「イングランドのチョーサー模倣者達には、スコットランドのダンバーのような詩人は一人もいない。……彼らはチョーサーの形骸のみを下手に模倣したに止まった」として English Chaucerians に批判的である。

安東氏の評価3のように、リドゲイト個人に対するネガティブな評価はどうであろうか。Milward (1969) の “hardly a great poet” という簡素な評価を初めとして、彼の晩年の作品群に対しては、松浪 (1977) が「たいていは長くて退屈なだけである」、マルガン (1978) が「その題材を逆行させて、Chaucer がそれらに生命を与えた以前の状態にした」と指摘している。文体論に関しては、高村 (1952) が「べらぼうな饒舌で、無意味な埋草の多い詩句をグラグラと書く」と指摘している。統辞法に関しては、ロジャーズ (1990) が「彼の著作は、10万行詩人に予想できる欠陥をすべてもっている。散漫であり、とりわけ統辞法は投げやりである。数多くのチョーサーの反響音は、最悪のコンサート・ホールで経験する音響効果に似たものを産み出すことがあまりにも多すぎる」と指摘している。しかしながら、最後の評価はリドゲイトだけに当てはまるものではない。「チョーサー以後の世紀に属する詩人たちは、英語の変化を続ける性質のまきぞえを一層強く受けた。これはとくに語尾の e の消滅においてみられる。この音の脱落のために、チョーサーが発音したように発音すれば自然でととのった美をそなえていた詩も、調子のわるいものになった」というエヴァンズ (1961) の記述がその論拠となるだろう。

これまで、リドゲイトに対するネガティブな評価だけを見てきたが、ポジティブな評価に関してはどうか。

当時（15, 16 世紀）の読者の立場を考慮して「翻訳家」としてのリドゲイトを高く評価する文学史家がいる。エヴァンズ（1961）とマルガン（1978）である。前者は少なくとも無為の非難を受けることはない……彼は多くの物語や伝奇物語を英語で読めるようにしてくれた」と、後者は「当時は Lydgate は非常な人気があった。その読者たちがありがたがったのは、あれほどにたくさんの物語を語ってくれたことと、それにある程度生彩を与えて話してくれたことであつた」と指摘している。ロジャーズ（1990）も「当時」に視点を置いて彼が高い名声を得ていた事実を評価している。「リドゲイトは多量の作品によって後世の桂冠詩人に似ていなくもない社会的地位を得た。……リドゲイトの死後も長い間、これらの詩は読まれ、称賛された。」一方、斎藤（1978）は「リドゲイトの写本や印刷本は多数現存し、当時チョーサー、ガウアーと並んで高く評価されていた」と述べるだけでなく、彼の作品が当時の世相を見事に反映している点を高く評価して、「彼の作品には、同時代の上流・上層中産階級の文芸趣味と要請が忠実に反映していることになる」「このようにリドゲイトの作品は同時代相を明らかに反映した暗い世界史的概観をもった大規模な労作で、その構想の中で人間の罪が厳しく罰せられること、地上の幸福が一時的なむなししいものであること、現世の名声が偽りであること、＜運命＞女神は気が変わりやすいこと、死の避けがたいことが説明されている」と記している。

以上の考察の結果、リドゲイトに対する評価にはネガティブなものやポジティブなものがあることが判明した。それぞれの文学史家たちの評価の立場を整理すると次の表のようになる。

	ネガティブ	ポジティブ		ネガティブ	ポジティブ
高 村（1952）	○		斎 藤（1978）		○
斎 藤（1957）	○		マルガン（1978）	○	○
エヴァンズ（1961）	○	○	橋 口（1983）	○	
Milward（1969）	○		ロジャーズ（1990）	○	○
松 浪（1977）	○				

注：○印で記す

表に示されるように、日本の文学史家たちにはリドゲイトのネガティブな評価だけを記述する傾向が強いように思われる。一方、エヴァンズ、マルガン、ロジャーズのように外国の文学史家たちは彼のネガティブな面の評価だけではなく、ポジティブな面の評価も読者に伝えて、彼に「歴史的な生命」を与えようとしている。ネガティブな面の評価のなかでは、安東氏〔橋口（1983）の当該執筆者〕の見解「虚名のみ高く、いたずらに多量のインクを空費したにすぎない」が一番手厳しい評価である。興味深い点としては、日本の文学史家のなかで安東氏と池上氏〔斎藤（1978）の当該執筆者〕が全く正反対の評価を下していることが挙げられる。安東氏がリドゲイトの作品を死に追込んでいるとすれば、池上氏には彼の作品を死滅から呼び返すような姿勢が見られる。

このように一人の作家に対して異なる評価が出るのは、文学史家たちの視点の違いにほかならない。即ち、文学史家たちが15, 16 世紀の視点に立って評価を下すならば、彼のポジティブな面が

見えてくるであろうが、現在(20世紀)の視点から過去を見るならば、チャーサーという大詩人の壁に遮られて彼のネガティブな面が浮き上がってくるのである。我々読者は歴史に対する文学史家たちの「地平」が一定ではないことを知っておかなければならない。

2. 岡沢(1972), 吉田(1980), 平井(1980), 前川(1982), 岡田(1985), 川崎(1986), 川崎(1988), 神山(1989), 芹沢(1990), 三ツ星(1993)のテキストのなかではリドゲイトの名前さえ触れられていない。どのような理由が考えられるであろうか。テキストの序, まえがき, はしがきに書かれた著者・編著者の言葉を手掛かりにしてこの問題点を探ってみよう。

(1) 主要な作品(原典)に重点が置かれている。前川(1982), 神山(1989)がこれに該当する。前者は「やはり作品があつての文学史」, 後者は「欠かせないのが, 原作とのふれあい」という見解の持ち主で, 多くの作家の作品を集めているが, (ページ数の制限のためであろうか,) 代表的な作家と作品に絞って小作家を割愛している。

(2) 文学史のテキストは略図でよいという考えによる。岡田(1985), 川崎(1986), 川崎(1988)がこれに該当する。彼らは文学史を地図・航空写真に譬え, 岡田は「案内人の地図は略図で間に合う」, 川崎(1986)は「本書はミニマム・エッセンスの航空写真である」, 川崎(1988)は「文学史が一種の地図のようなもの」という見解の持ち主で, 情報の不足部分に関しては文学史の担当者が補足説明を加えることを切望している。とりわけ, 川崎(1988)は同じ出版社から吉田『英米文学史概要』(1980)という「精密で正確な地図」が既に出ているので, 「もうすこし簡便な」テキストを考えてのことによる。

(3) テキストが一般読者向けに編まれている。平井(1980), 芹沢(1990)がこれに該当する。前者は「専門的な研究者のためのものでなく, 一般的な教養のためのイギリス文学史」で充分であると考えて, イギリス文学の歴史的な展望を「素描」している。後者は日本の英文科の学生および一般読者が「初めて読む」という点に照準を定めてイギリス文学の歴史を記述している。

(4) 講義に対する配慮がなされている。「その後たまたま英文学史の講義を担当するに当たっても, 前回と同じ感じを抱いた」という岡沢(1972), 「均衡のとれた講義を行うかに, 筆者自身数年間頭を痛めて来た」という吉田(1980)がこれに該当する。前者は「毎週1回90分の講義で1年間にこれを完了することは, 言うべくして実行不可能なことである」という見解の持ち主で, 主要な作家とその代表作に目を向けている。後者は「最低一年三十週をもって, 一通り英米文学の流れを概観し, 現行制度下で少しでも能率的な講義の材料を提供したい」という見解の持ち主で, 「文学の心」も「作品の持つ美しい魅力」もない歴史記述を行っている。

(5) テキストの編纂事情による。文学史家たちには千数百年の歴史があるイギリス文学の必要な事項を限られたテキストのページ数に盛り込むことが要求されるので, 記述の取捨選択に彼らの裁量権が行使されるのは当然のことである。吉田(1980)の「紙面の関係も勿論あるが」, 前川(1982)の「そこで限られたページ数ではあるが」, 芹沢(1990)の「ページ数の限られた小著」という言葉がこの論拠となるだろう。

(6) 大作家の年代誌に従って整理されている。芹沢(1990)の「重要な作家・作品については、多くのスペースを与えることを躊躇しないことにした」、三ツ星(1993)の「英文学史上、筆者が詳しく取り上げたいと考えた作家と作品に関して、比較的多くのページを割り当て、その代わりさほど重要でないものについては、記述を少なくしたり、あるいは全然触れないことにした」という言葉にこの論拠を求めてもよからう。

以上、6つの理由を挙げてみたが、どの理由を考えてみても、それ相応の論拠に支えられているので異議を唱える余地が無いように思えるかもしれない。だが、リドゲイトに関する歴史記述を含んだ佐瀬(1962)、小倉(1975)、橋口(1983)、志子田(1992)の言葉にも耳を傾けるならばどうであろうか。佐瀬の「本書は大学の英語・英文学科の学生のために、また一般教育課程の教材として、さらに広くは英文学にわけ入りたいと思う人びとへの案内書」「また限られたページ数に」という言葉には(3)と(5)に相当する理由があり、小倉の「まして僅か160ページそこそこの限られた枠の中にそれを収めることなど、実のところ不可能に近い」「主だった作家や作品の名前だけでも知ることができるようにと書いて書いたのが本書」という言葉には(5)と(6)に相当する理由があり、橋口の「かぎられたスペースの中に、必要な知識を整理して盛りこむのは容易なことではない」「本書は、大学で行なわれるイギリス文学史の講義のテキストとして使われることを考慮に入れて構想されている」という言葉には(5)と(3)(4)に相当する理由があり、志子田の「1500年以上にわたるイギリス文学史を、大学における通常1年間の講義で委曲を尽くすことは、はなはだ困難である」「本書はもとより教科書として書かれたものであり、教室で教師が講義するための手掛かりとして、その人なりの講義を可能にする余地を作り出すため、あえて解説、説明の類を抑えてある」という言葉には(4)と(2)に相当する理由がある。誰の目にも明らかと思えたような理由でもこのような論拠の前では矛盾を含んでしまう。とどのつまり、ここで言えるのは、ある作家と彼の作品がテキストのなかに記述されるかどうかは、執筆者(文学史家)の匙加減にかかっているということだけかもしれない。

3. 図1はBritish Libraryに所蔵されているある写本に出る細密画であるが、おそらくこの絵はチョーサーの『カンタベリ物語』写本に描かれたものであると考える読者(学生)諸君は少なくないだろう。どのような理由が考えられるであろうか。

(1) 英文学史のテキストのなかで、斎藤(1978), p. 62; ロジャーズ

図1



(1990), p. 60 ; 『英米文学史講座 I』 (研究社, 1962), p. 87 ; G. C. Thonley and Gwyneth Roberts, *An Outline of English Literature* (1968 ; rpt. Longman, New Edition, 1984), p. 17 にその絵が掲載されているが, それらはすべてチョーサーの『カンタベリー物語』の解説に添えられたものである。文学史家たちは読者に物語の視覚的理解を施そうとしてその絵を挿入したにちがいないが, ロジャーズの [キャンタベリーを發つ巡礼の一行 : 「ベリーの修道僧ジョン・リドゲイトによって哀切に語られる」] 『テーベ包圍』の写本より, 未完の『キャンタベリー物語』に, 彼によってこの作品が付け加えられた] のように, 絵の下に記された解説がなければ, 読者は英文学史においてその絵がリドゲイトと結び付いていることを知る由もないだろう。このことは, 平易な現代英語に書き下ろされた一般教養課程用テキスト *The Canterbury Tales* (豊田一男注釈, 英潮社), p. 3 に出る絵と Geraldine McCaughrean, *The Canterbury Tales* (松田英・安田淳編注, 開文社) の口絵にもあてはまる。

(2) 英文学史のテキストのなかで, 松浪 (1977) に「*The Siege of Thebes*... これはチョーサーの *The Canterbury Tales* の帰路にかの Knight が語るようになっていて, 斎藤 (1978) に「『カンタベリー物語』の補足として計画したらしい *The Siege of Thebes* 【テーベ攻城】は, 詩人自身巡礼の中に加わり, 「序詞」でキャンタベリー詣での帰り道での話という趣向で」のような記述が見られるが, これらの記述を図 1 と関連付けられる読者は少ない。

英文学史のテキストにおけるこの細密画は, リドゲイトにポジティブな評価を与える素材であるにもかかわらず, 掲載された位置の関係でチョーサーの価値を高める役割しか果たしていない。

結 語

日本人の眼から見て編纂された英文学史のなかには, 中世第一の多作家として知られているジョン・リドゲイトの名前さえ触れないものもあれば, 借りものの知識で彼のことが繕われていると勘繰りたくなるほどの歴史記述しかないものもある。文学史家たちのなかには, (1) 日本の英文学会においてリドゲイトの評価が極めて低いから仕方が無い³, (2) 彼の作品が翻訳されていないので評価が下せない⁴などの理由を挙げてこの見解に反論する者もいることだろうが, テキストの編纂において松浪 (1977) [当該執筆者: 松浪有], 斎藤 (1978) [当該執筆者: 池上忠弘], 橋口 (1983) [当該執筆者: 安東伸介] のように中世の専門家による分担執筆にするならば, リドゲイトに対する評価——ネガティブなものであれ, ポジティブなものであれ——を記すことぐらいはできるだろう。特に, 中世に活躍した文字どりの群小作家リドゲイトに対するポジティブな評価

3 1983年に中世イギリス研究資料センターから刊行された『中世英語英文学研究業績リスト』, p. 197を見ると, リドゲイトに関する著書・論文は僅かに5本である。一方, 最近の全国大会レベルの学会発表において, リドゲイトの名前は時々聞かれるが, 彼の作品が発表のメインになることはない。

4 「下井草通信第26号 英米文学」(下井草書房, 1993)や「翻訳文献第1号 英米文学とその周辺」(須雅屋, 1993)の古書目録を初めとして, 各出版社発行の図書目録・解説目録を参照してみたが, 過去にリドゲイトの作品が邦訳されたという証拠は見当たらない。

に関しては、文学史家が「印象派の絵画を鑑賞するには正しい距離を置く必要があるように、一般に過去の芸術作品を評価するにはそれを正しい視角から見る必要がある」という〈ヴィジョンの類型〉理論⁵に基づかないならば、斎藤（1978）のような評価は今後も期待できそうにない。

[付 記]

私は安東氏（現慶應義塾大学教授）の記述に対して些か驚愕の念を隠しきれなかったので、真相を確かめようと先頃（1993年5月28日）氏に直に手紙を書きました。

「なぜ、このような酷評を当時お下しになったのかをもしよろしければお聞かせ願えればと思っております。また、昭和58年当時に書かれた時から今では10年近い月日が経過しております。今ではどのような評価をおもちでしょうか。よろしければお聞かせください。」

（この文は手紙の一部）

このような突然の手紙、しかも、まことにぶしつけな私の質問を読まれて安東先生は腹を立てられたかもしれません。私はこの論文を執筆し始めた段階（7月末）までに返答をいただけなかったので諦めていましたが、有り難いことに、先生から（8月7日付けの）快い返事を受け取りました。ここに謝意を表しまして、その一部を紹介しておきます。

「さて、お手紙の件、リドゲイトに関する私の考えは今日も変わっておりません。なる程、少々コクに過ぎる文章（表現）だったかも知れませんが、それはともかく、中世英文学中、リドゲイトは極めて退屈な存在で—— もっとも、中世文学には退屈なものが多いのですが—— 中世という世界の一つの表現には違いありませんが、チャーサー、ラングランド、ガワー、「ガウエイン」ポエットに比べればはなはだ浅いのです。夏休みに入って、信州の山荘に移り、少々リドゲイトを読み直してみましたが、この印象は変わりません。…… 文学史—— 特に学生向きの文学史は「公正」であるべきですが、「公正」とは、評価抜き、ということではなく、私としては、ご覧のような記述になったという次第です。」

5 マリオ・ブラーツ著 若桑みどり、他訳『官能の庭』、ありな書房、1992年、p. 217。ここで、近年シルマー教授が中世の詩学に照らしてジョン・リドゲイトを再評価しているという指摘は注目に値する。

[付 録] 以下は、リドゲイトに関する記述箇所である。彼の名前さえ触れていないテキストには「記述なし」と記す。

1 大和資雄「英文学史（上・下巻）」、野村書店、1946年、p. 42

「チョオサーに私淑した詩人に彼の肖像をつたへたホックリヴ（Thomas Hoccleve 又はオックリーヴ Occleve）やリドゲイト（John Lydgate）があり、後者はロンドン生活の社会面をパノラマのやうに描いた詩を書いた。併し殊にチョオサーの影響をうけたのはスコットランドの詩人たちであった。」

2 高村勝治編著「英語・英米文学講座 英米文学史」、河出書房、1952年、pp. 40-41

「イングランドのチョーサー模倣者達には、スコットランドのダンバーのような詩人は一人もいない。オクリーヴやリドゲイトは、直接チョーサーと面識もあり、チョーサーを師匠と言っている。しかし彼らはチョーサーの形骸のみを下手に模倣したに止まった。…… ジョン・リドゲイト（John Lydgate, 1370?-1450?）は、イギリス中世を通じて、最も多作な詩人である。この人は質よりも量という心掛けで作ったらしい。文體にもそれが表われている。べらぼうな饒舌で、無意味な埋草の多い詩句をダラダラと書く。『テーベの攻圍』（*The Siege of Thebes*）、『トロイ物語』（*The Troy Book*）、『王侯の没落』（*The Fall of Princes*）、『ガラスの殿堂』（*The Temple of Glass*）、『人生巡禮』（*The Pilgrimage of the Life of Man*）などの長篇のほか、聖エドモンド（St. Edmund）、聖マーガレット（St. Margaret）などの聖者傳や、聖母傳説その他を書いた。」

3 斎藤勇「イギリス文学史（改訂増補第五版）」、研究社、1957年、1974年、pp. 57-58

「Story-teller としての Chaucer には、England にも Scotland にも追隨者が出た。…… ‘Monk of Bury’ と呼ばれる John Lydgate (?1370-?1451) は、*Troy Book* (1412-20) や *The Fall of Princes* (君主没落記。1430-40, prtd 1494) など物語詩を書いた。両人の作はいたずらに師になずんだものであり、そしていずれも甚だ長い。Lydgate のだけでも合計 14 万行に及ぶ。彼は韻律法も Chaucer に倣って rhyme royal や heroic couplet を用いた。…… この時代における Chaucer 亜流の英詩は、不適切な譬話が多く、韻律は定型に拘束され、用語は平板に墮し、すべて法則に囚えられ、かつ冗漫であった。」

4 R. H. Blyth, *A Survey of English Literature*, 北星堂, 1957年, pp. 69-70

“Like Gower, John Lydgate, c.1373-c.1460, was very fluent and prolific. His *Story of Thebes*, *The Fall of Princes* (from Boccaccio), and *The Troy Booke* are his chief works. The following is a verse from *The Life of Our Lady*. It has great beauty of thought and expression:

O thoughtful heartē, plungēd in distress

With slumber of sloth this hugē winter night,
Out of the sleep of mortal heaviness
Awake again and look upon the light
Of thilke star that with her beamēs bright
And with the shining of he shenēs merrie,
Is wont to gladden all our hemispherē.

But Lydgate is better known for a short poem *London Lickpenny*, a satire on the power of money; each verse ends with more or less the same line:

But for lack of money I could not spede.

The most interesting and vivid verse is the following, number twelve of sixteen:

Then I hyed me into Est-Chepe;
One cries 'rybbes of befe', & many a pye;
Pewter pottes they clattered on a heape;
There was harpe, pype, and mynstralsye.
'Yea, by cock!' 'Nay, by cock!' some began crye;
Some songe of Jenken and Julyan for there mede;
But for lack of mony I myght not spede."

- 5 アイヴァ・エヴァンズ著 朱牟田夏雄 他共訳『小英文学史（改訂増補第4版）』、北星堂、1961年、1984年、pp. 24-25

「チョーサーが詩人としてあまりに秀れていたため、十五世紀には一般に低調に見えてしまう。チョーサーの模倣者が文壇に現われたが、いたずらに嘲罵を受けるにとどまった。トマス・オクリーヴ（Thomas Occleve, 1370?-1450?）も、ジョン・リドゲイト（John Lydgate, 1370?-1451?）もその例にもれなかったが、後者は少なくとも無為の非難を受けることはない。じっさい、誰もチョーサーの最上のものを模倣してはいない。リドゲイトその他は、彼ら独自の試みによって、それぞれ別個に、はるかにもっと高い評価を得ている。リドゲイトは翻訳家であった。少なくとも彼は多くの物語や伝奇物語を英語で読めるようにしてくれた。チョーサー以後の世紀に属する詩人たちは、英語の変化を続ける性質のまきぞえを一層強く受けた。これはとくに語尾の e の消滅においてみられる。この音の脱落のために、チョーサーが発音したように発音すれば自然でととのった美をそなえていた詩も、調子のわるいものになった。」

- 6 佐瀬順夫『要説イギリス文学史 [増補版]』、英宝社、1962年、1986年、pp. 26-27

「Chaucer に私淑した詩人に、Thomas Occleve（または Hoccleve, ?1368-?1450）や John Lydgate（?1370-?1451）がある。」

7 斎藤勇『英文学史概説』, 研究社, 1963年, p. 20

「中世末期における Chaucer の影響は、顕著であった。England には教訓癖の多い Sir John Gower (?1330-?1408), John Lydgate (?1370-?1451) などがあり、いずれも万を越える行数の冗漫な長詩を書いた。」

8 Peter Milward, *A Historical Survey of English Literature*, 研究社, 1969年, pp. 17-18

“Chief among Chaucer’s imitators was JOHN LYDGATE (1370-1451), a prolific versifier, but hardly a great poet. The story of Troy, already utilised by Chaucer in his *Troilus and Criseide*, he retold at great length in *The Troy Book*. The popularity of this subject is further attested by Caxton’s prose translation of *The Recuyell of the Histories of Troy*.”

9 平井正穂・海老池俊治編著『イギリス文学史』, 明治書院, 1971年, pp. 42-43

「十五世紀はふつう、イギリス文学史上の不毛の時代といわれる。なるほど、前世紀に見たようになすぐれた作品はなく、前世紀の継続であって、新天地が開拓されることはなかった。……世俗的な作品に目を向けると、民衆教化の物語の枠としての寓意や夢物語が相変わらず用いられる。この世紀を通じてチョーサーの影響は絶大で、中世第一の多作家リドゲイト John Lydgate (1370-1451) やホクリーヴ Thomas Hoccleve (1369-1450) のような、その流れを汲む詩人たち Chaucerians が輩出し、……」(忍足欣四郎)

10 岡沢武『イギリス文学史概説』, 篠崎書林, 1972年 「記述なし」

11 小倉多加志『イギリス文学史要説』, 南雲堂, 1975年, pp. 12-13

「Chaucer の死後 English Chaucerians [John Lydgate, Thomas Hoccleve (Oocleve) など] や, Scottish Chaucerians (Scotland 王 James 1 世, Robert Henryson など) が現れた。」

12 杉本龍太郎・J. C. McDonald, *A Brief History of English Literature*, 篠崎書林, 1976年, p. 9

“The fifteenth century saw the productions of some of Chaucer’s disciples in both England and Scotland. John Lydgate and John Skelton were among his English disciples, while King James I of Scotland, William Dunbar, Robert Henryson, Gawain Douglas, and Sir David Lindsay were among the more eminent Scottish Chaucerians. We want to say a few words concerning Skelton. He wrote poems in rhyme and metre irregular, usually two accents to a line. This short line is called ‘Skeltonic’,”

13 松浪有・御輿員三「講座 英米文学史 詩 I」, 大修館書店, 1977年, pp. 291-292

「チョーサーの後継者として第1に挙げられるのはトマス・アスク (Thomas Usk, d. 1388) で、……しかし、もっとも多作であったのはジョン・リドゲイト (John Lydgate, 1373?-1450?) であって、彼の宮廷風な恋愛詩 *The Complaint of the Black Knight* (『黒騎士の嘆き』) には、チョーサーの *The Book of the Duchess* の影響がありありとうかがわれ、また *The Temple of Glass* (『ガラスの城』) もチョーサーが得意とした 'dream vision' の構想をならったものである。あるいは、*The Geste Historiale* または *The Siege of Thebes* (『テーベ包囲戦記』) はフランス語の散文で書かれた *Roman de Thèbes* を短縮したものであるが (それでも4,716行ある)、これはチョーサーの *The Canterbury Tales* の帰路にかの Knight が語ることになっていて、'The Knight's Tale' と対をなす。しかし、もともと聖職者であったリドゲイトには教訓的な詩も多く、*Reason and Sensuality* (『理性と感性』)、*The Life of Our Lady* (『聖母の生涯』) 等のほか、いくつかの聖徒伝も書いている。晩年のリドゲイトは、もっぱら大部の翻訳を次々に完成し、*The Troy Book* (『トロイ物語』)、先に挙げた *The Siege of Thebes*、*The Pilgrimage of the Life of Man* (『人生遍歴』)、*The Fall of Princes* (『貴人の没落』) 等があるが、たいていは長くて退屈なだけである。とはいえ、リドゲイトの弟子 (Stephen Hawes 1475?-1525) は、チョーサーの詩風を16世紀初頭に至るまで伝えた。」(松浪有)

14 斎藤美洲編著「イギリス文学史序説 社会と文学」, 中教出版, 1978年, pp. 68-70

「チョーサーの一番弟子であることを自認したジョン・リドゲイト (John Lydgate, c.1370-1450) は最も意識的に彼を模倣し、彼の一番の追従者としての役割を果たした。リドゲイトはベリ・セント・エドマンズ (Bury St. Edmunds) にある著名なベネディクト会大修道院の修道士として生涯の大部分をそこで過ごしたが、宮廷にも出仕していて、国務でフランスに旅行したこともあった。また彼は多くのパトロンを持ち、ヘンリー五世、ヘンリー六世、グロスター公ハンフリー、ウォリック伯夫人などからロンドンの同業組合にまで及んでいる。したがって彼の作品には、同時代の上流・上層中産階級の文芸趣味と要請が忠実に反映していることになる。リドゲイトの写本や印刷本は多数現存し、当時チョーサー、ガウアーと並んで高く評価されていた。修道院図書館を利用して14万5千行もの詩作を残した、類を絶する多作家であり、ある意味ではチョーサーを発展させた詩人ともいえる。代表作は次の長大な二つの作品であろう。伝統的な教訓的寓意詩を使用した、3万行にも及ぶ *The Troy Book* 『トロイの書』(1412-20) は、ハル (Hal) 王子の命で13世紀のグウイド・デレ・コロンネ (Guido delle Colonne) 作 *Historia Troiana* 『トロイ史話』を自由訳したもので、有名なトロイ伝説を扱った長篇ロマンスであるが、その底流には未来の国王に政治的道義を説く姿勢が見られる。もう一つはグロスター公ハンフリーの要望で書かれ、約3万6千行にも及ぶ *The Fall of Princes* 『王侯の没落』(1431-38) で、ボッカチオ作 *De casibus virorum illustrium* 『気高き者の没落』のフランス語散文訳に拠ったもの。有名な王侯貴族を主人公とする中世的悲劇物語集であり、政治問題を扱っ

て国王の責任、社会秩序の必要、社会階層の相互関係、内乱の結果などを論じている。アレゴリーを使用した愛の夢想の作品には *Complaint of the Black Knight* 【黒騎士の嘆き】や *The Temple of Glass* 【ガラスの神殿】(1403) があり、フランス語から翻訳した *Dance Macabre* 【死の舞踊】(c. 1426) は、当時の思想・芸術の主題を導入した。【カンタベリー物語】の補足として計画したらしい *The Siege of Thebes* 【テーベ攻城】(1420-22) は、詩人自身巡礼の中に加わり、「序詩」でキャンタベリー詣での帰り道での話という趣向で、12世紀の *Roman de Thebes* の散文訳を参照しながら、テーベ支配の問題でオイディプス (Oedipus) の二人の息子が相争った騎士道叙事詩において、戦争と平和を議論している。ハル王子の命で書いた *The Life of Our Lady* (c. 1434) は聖母マリア賛美のさまざまな歌を集大成したものであり、フランス詩の英訳である *Reason and Sensuality* (c. 1408) は中世プラトン思想の宮廷風寓話で、宇宙の美と調和の源である<自然>女神が詩人に<理性>の貞潔の教えに従うよう勧める物語詩である。ギョーム・ド・ドギルヴィル (Guillaume de Deguileville, ?1293-?1380) の *Le pèlerinage de la vie humaine* 【人生の巡礼】の英訳で、約2万4千行にも及ぶ *The Pilgrimage of the Life of Man* (1426-30) は、ソールズベリー伯トマス・ド・モンタキュート (Thomas de Montacute) の要望で書かれたもので、人生を霊的旅(巡礼)としてとらえ、教訓的アレゴリーを使って人間生活とその運命をまとめている。このようにリドゲイトの作品は同時代相を明らかに反映した暗い世界史的概観をもった大規模な労作で、その構想の中で人間の罪が厳しく罰せられること、地上の幸福が一時的なむなししいものであること、現世の名声が偽りであること、<運命>女神は気が変わりやすいこと、死の避けがたいことが説明されている。」

(池上 忠弘)

- 15 J. マルガン&D. M. ディヴィン著 成田成寿訳「イギリス文学史<増補版>」, 八潮出版社, 1978年, 1991年, pp. 35-36

「その衰退は急激で、Chaucerを知っていて、彼を師と仰いでいた者たちにも、あらわれていた。彼らは主として翻訳者、あるいは、模倣者であった。…… John Lydgate (1370-1451) という Bury St. Edmunds のベネディクト教団修道僧は、飽くことをしらぬ編集者であった。彼の書いた長い詩には、*Story of Thebes* と *Troy-Book* があり、これらは有名なフランスのふたつの物語を書き直したもので、その *Fall of Princes* は Boccaccio のラテン語のものを書き直したものである。その題材を逆行させて、Chaucer がそれらに生命を与えた以前の状態にした。しかし、当時は Lydgate は非常な人気があった。その読者たちがありがたがったのは、あれほどにたくさんの物語を語ってくれたことと、それにある程度生彩を与えて話してくれたことであった。」

- 16 吉田三雄「英米文学史概要(改訂版)」, 成美堂, 1980年 「記述なし」

- 17 平井正穂「イギリス文学史 人間像の展開」, 筑摩書房, 1980年 「記述なし」

- 18 前川祐一・江河徹・船戸英夫『原典で読む英文学史』, 弓書房, 1982年 「記述なし」
- 19 橋口稔編著『コンパクトイギリス文学史』, 荒竹出版, 1983年 「前述参照」
- 20 岡田忠軒『ブックレット英文学史』, 南雲堂, 1985年 「記述なし」
- 21 川崎寿彦『イギリス文学史入門』, 研究社, 1986年 「記述なし」
- 22 川崎寿彦『イギリス文学史』, 成美堂, 1988年 「記述なし」
- 23 神山妙子編著『はじめて学ぶイギリス文学史』, ミネルヴァ書房, 1989年 「記述なし」
- 24 芹沢栄『イギリス文学の歴史』, 開拓社, 1990年 「記述なし」

- 25 パット・ロジャーズ編 櫻庭信之監訳『図説イギリス文学史』, 大修館書店, 1990年 p. 63

「チョーサーとガワー以降の「宮廷詩人」の第一世代の主要人物は、トマス・ホクリーフ（1366年頃-1426年）とジョン・リドゲイト（1370年頃-1449年）である。リドゲイトはベリー・セント・エドマンズのベネディクト教団の僧院の修道僧であり、ホクリーフはウェストミンスターの玉璽（Privy Seal）局の文官だったが、ふたりの文学世界は非常に似ていた。ふたりともヘンリー五世と弟のハンフリー・オヴ・グロスター（Humphry of Gloucester）にあてて詩を書いたし、ふたりともチョーサーを師とみなしていた。しかし彼らはお互いに大変異質な作家だった。リドゲイトは多量の作品（10万行は優に越える）によって後世の桂冠詩人に似ていなくもない社会的地位を得た。『トロイの書』（*The Troy Book*, 1412-20）、『テーベ包囲戦』（*The Siege of Thebes*, 1420-22）、『王侯の没落』（*The Fall of Princes*, 1431-38）、『聖母伝』（*The Life of Our Lady*）で、歴史上の大テーマをはなばなく描いたものを残した。リドゲイトの死後も長い間、これらの詩は読まれ、称賛された。『王侯の没落』は初期の印刷業者によって4度印刷され、『君侯のかがみ』（*The Mirror for Magistrates*, 1555）という続編〔イギリスの王侯の没落をめぐるもの〕を産むきっかけとなった。リドゲイトについてはこう言われている、彼は「自分の役割を、英語のために高尚な詩文の文体を確立したチョーサーの功績を系統的に統合整理することとみなしていた」と。この点においては彼は成功したといえるかもしれない。しかし彼の著作は、10万行詩人に予想できる欠陥をすべてもっている。散漫であり、とりわけ統辞法は投げやりである。数多くのチョーサーの反響音は、最悪のコンサート・ホールで経験する音響効果に似たものを産み出すことがあまりにも多すぎる。」

- 26 志子田光雄『英国文学史要』, 金星堂, 1992年, pp. 8-9

「Chaucerの影響を受けた詩人たちは多い。English Chauceriansと呼ばれる *Troy Book* (1412-20) の著者 John Lydgate (?1370-?1451) や、……」

- 27 Peter Wagner, *An Outline of English Literature*, マクミラン, 1992年, p. 14

“The fifteenth century did not produce a poet of Chaucer’s stature. But it would be misleading to label it a barren age for literature. Although poets such as Thomas

Hoccleve (or Occleve, c. 1369–1426), John Lydgate (c. 1370–1449) and John Skelton (c. 1460–1529) did not go beyond the imitation of Chaucer, popular poetry (songs and short verse) flourished, especially the Scottish ballad.”

28 ミツ星堅三「イギリス文学史概説」, 創元社, 1993年 「記述なし」

(1993年9月8日受理)